

## ベルナのしっぽ

郡司ななえ著 (ナナ・コーポレート・コミュニケーション 2003.6)

私がまだ中学生の頃、街で初めて盲導犬を見た。以前から盲導犬のことはテレビで知っていたが、目の前で見たのは初めてだった。犬なのに人間の補佐をし、人間の目となって働く姿は感心してしまうものだ。現在は私のようにテレビや映画など色々な方面から盲導犬の存在や役割を知り、街全体も受け入れているが、この本の著者・郡司ななえさんとそのパートナー犬ベルナが出会った頃はまだ社会的に盲導犬が認知されてなく、郡司さんは苦労したようだ。ベルナと一緒にいる時は、スーパーや飲食店では当たり前のように入店を断られ、電車やバスなどの公共の乗り物でさえ乗れないこともあったそうだ。

盲導犬と目の見えない人に対する環境は良い方向に変化し、今では公共の乗り物はもちろん、スーパーやデパート、飲食店のほとんどが盲導犬の入店を許可している。それは、盲導犬が数々の厳しい訓練を受け、人間の目となり、知らない人にも吠えないのはもちろん、テレビや映画などで盲導犬を知ることが多くなったことも大きな要因であるだろう。

この本の内容は、著者の郡司さんと盲導犬ベルナが出会ったいきさつと、郡司さんの出産・育児にベルナが関わってきたことなどが載っている。大の犬嫌いだった郡司さんが、「お母さんになりたい」と思ったのをきっかけに、最初はベルナとうまく心が通じ合わない



ながらも、一緒に暮らす頃には信頼できるパートナーになっていく過程は応援したくなり、どんなフィクションの物語よりも感動するものだ。しかし、盲導犬が賢いがゆえに大変なことになる場面も多い。例えば、郡司さんが子供のことばかりに気をとられているとベルナは不機嫌になり、子供の体を洗うせっけんを食べてしまうようなことをするのだ。

もし、人対人であれば言葉で伝えることができるが、人対犬は行動で示さなくてはならない。そこが、動物と共存する上で難しいところだろう。

最後に、盲導犬と目の不自由な人に対し、明らかに盲導犬の数が足りない。私たちが協力できることは数限られているが、盲導犬と目の不自由な人に優しい街づくりをしなくてはならない、とこの本を読んで改めて感じた。

(文化学部日本語日本文化学科4年 小林洋子)

## 大黒屋光太夫史料集 全4巻

山下恒夫編纂 (日本評論社 2003.1-2003.6)

大黒屋光太夫については、井上靖が『おろしや国酔夢譚』を、吉村昭が『大黒屋光太夫』を書き、その漂流顛末については多くの本に著されているので知る人も多い。また日露関係史の重要事項として、必ずと言っていい程、大黒屋光太夫が登場する。

日本人漂流民の中で、日本の文化に最も影響を与えたのは大黒屋光太夫であろう。光太夫が直接書き残した史料は僅かではあるが、この漂流がもたらした影響は江戸時代だけでなく現在までも続いていると言っても過言ではない。関連する史料は膨大である。

本史料集は、全4巻で総ページ数3150ページに及ぶ膨大な史料集である。言うまでもなく一漂流を扱った史料集としては空前絶後と言っていい程の巨著である。内容を見ると、蝦夷地に来航したロシア船に関する日本側史料が14点、光太夫らのロシアでの漂泊を記した日本側史料が11点、光太夫らの懐旧談が13点、ロシア側史料が4点、光太夫らの帰還後の史料18点、絵図史料が8点などである。その他に短い史料が数十点掲載されている。これらの史料の1点1点には、詳細な解説が付けられてもいる。また索引は60ページもあって、この膨大な史料集を使いやすくしている。

編者の山下氏は、あとがきに「近世史上において、これまで正史から見落とされ、一貫して余話の扱いしか受けてこなかった漂流民



たちの足跡に、とことん付合おうという物好きなんぞたえてなかった」と書いているが、確かについ最近までは、光太夫らの数奇な運命と、彼の精神的強靱さが物語的に取り上げられることがほとんどであった。

本書によって、大黒屋光太夫の歴史的な役割と、日露関係史の中での光太夫の位置づけが確定し、歴史研究だけでなく日本文化研究に寄与すること計り知れない。本書は山下氏が10年の歳月を費やした好史料集であるが、彼はこの後、岩波新書『大黒屋光太夫』を著し、昨年亡くなってしまった。本史料集は山下氏の命をかけた遺産と言える。少々、重厚であるが本当の歴史に触れるために、是非読んでみることをお勧めしたい。

(文化学部助教授 川上淳)